

第6回 大町市少子化社会における義務教育のあり方検討委員会 会議録

開催日時 令和元年11月6日(水) 午後6時30分
開催場所 大町市役所 東大会議室
出席委員 山崎晃 縣邦彦 立川史明 中村敦 百瀬泰慶 柳澤英幸 菅沢一彦
海川明文 勝野英男 堀祐介 北澤豊繁 小林平八 飯沢壮一
荒井英治郎 高橋克好 吉澤義雄 重田あまな 金原徹 中村勝彦
19名
説明者等 荒井教育長 竹内教育次長 三原学校教育課長
一本木庶務係長 久保田学校教育課長補佐
中村学校教育指導主事 塩原学校教育指導主事

1 開会

竹内次長 (開会あいさつ)

2 教育長あいさつ

荒井教育長 本日は、2回目の保護者アンケートの結果、そして、部会を3回開いていただいた内容の骨子について、今日の全体会議でご報告いただき、皆様から忌憚のないご意見をいただきたい。

なお、前回の会議の時にも申し上げたが、この委員会は、急激な少子化の中で、今後の義務教育についてどんな方向を出していくのがいいのかをご協議いただく場であり、この場でお話し合いいただいたことが、決定でもなければ、そのまま市全体の方針になるということでもない。皆さんにご検討いただいた内容を、私どもにご報告いただき、教育委員会では、それをベースにして、市民の皆様から広くご意見をいただきながら、最終的に市長と教育委員会が最終的な方針を定めて、必要な内容については、議会議決等を取って、そこで初めて具体的な決定となるわけで、その辺のところを十分ご了承いただきたい。

報道の皆さんにお願いがある。忌憚なくご意見をいただく場であることを理解いただき、ご配慮をお願いします。

3 協議

柳澤委員長 さっそく協議に入る。(1)保護者アンケートの結果について、説明をお願いします。

一本木庶務係長 (説明)

柳澤委員長 次に研究部会の協議内容の報告をお願いします。

竹内次長 その前にお願いしたい。(2)、(3)に入る前に、資料の説明をさせていただく。(説明)

A委員 研究部会の報告をさせていただく。

前回の委員会での議論を受けて、研究部会として、市民アンケートや保護者アンケートとは別に、学校現場の様子、学校の先生方が今、どんなふうに子ども達の指導の中で、また学校運営の中で、どんな問題を持っているのか、突き詰めるために夏休みを中心に、市内のすべての学校を訪問して、校長先生から聞き取り調査を行った。

その内容は、今日の資料の5ページと6ページに載せてある。7ページから14ページには、それぞれの学校の聞き取り調査をまとめてある。

第2回目の研究部会を10月16日に行い、各学校での聞き取り調査の結果について話し合った。その中で、児童・生徒数が減少して、学校現場はいろいろな不安を抱えながら日々の教育活動に取り組んでいる実態を研究部会員全体で理解できたのではないかと思う。

主なものを資料の5ページに4つ挙げてあるが、校長先生方からは、来年、新しく入ってくる1年生が1クラスになるとの見込みが示され、西小、南小、北小でその心配があるとのことであった。

学級が今まで2クラスだったものが1クラスになることによって、理科専科の教師が配置できなくなることが心配され、理科の先生が配置できなくなるということは、学校運営にとって非常に大きいことで、新しい教育課程では、理科の授業数がぐっと増えているし、理科は他の教科と違って、準備、特に小学校3年生からの生物などの準備にしても、教材の準備にしても、植物の成長過程の学習にしても、十分準備していかなければいけないので、理科専科の先生がいなくなることによって、担任がそれをしなければならなくなる。

美麻では、小中一貫になっているから、中学の理科の先生が、小学校へ行って授業をしている。八坂も中学の理科の先生が、小学校へ行って授業をやっているが、旧市内の4校については、そういうようなことが困難であると思われる。

それから、一中でも、来年度新入生が2クラスになる心配があって、その結果、クラスの減と同時に、教員数に11加配という制度があるが、それが11を切ってしまうので、教員が2名減ってしまう。特に数学や英語では少人数学習などの多様な指導をしているが、それが組めなくなってしまう。仁科台でも、学級数が減ることによって教科の先生の人数が少なくなると、少人数だとか、習熟度別の指導ができなくなるという話を伺った。

また、小・中とも、教員が減ることによって一人当たりの校務の増加が当然出てくるわけで、先生方が出張や研修等でいないときに、他の先生がその授業を補充することができなくなってしまう、または、しにくくなってしまう恐れがあるとのことであった。さらに、年休も取りにくくなる心配もある。

子ども達側から言えば、多様な考えだとか、多様な経験をしている子ども達が集まって学習を進めていくような機会がなくなってくると同時に、例えば体育での球

技種目の人数が足りないとか、または音楽での合唱や合奏などの集団学習の機会が失われていく心配、そんな声もあった。

次のページから、アンダーラインで特徴的なことを示してあるので、見ていただければと思う。

それから、事務局にも現在の少子化に対して、どのような課題があるのか出してもらい、15 ページ、16 ページに資料のとおり、それについても議論してきた。

そして、先ほど説明のあった、第2回目の保護者アンケートは、大町市全体としては、学校の適正配置を再検討するというような意見が、多数を占めていることから、第2回の研究部会では、通学区の見直しと再編に向けて検討を進める必要があると考え、それに際しては、国が標準として示している12学級以上18学級の形で考えれば、小学校は美麻と八坂を除くが、小学校2校、中学1校をまず基本的にして、話し合ってみようと、第2回目はそんなふうに終わった。

また、先ほど言った、美麻と八坂を除くというのは、美麻と八坂については、小規模校としての特徴をしっかりと生かし、山村留学制度とか特認校制度、それから、地域のコミュニティと一体となった学校づくりに取り組んでいて成果が出ているので、その2校については、当面、様子を見ていく。そのような意見で、第2回目の10月16日は終わった。

そして、第3回目の研究部会は11月1日に行い、旧市内の小学校4、中学校2校について、どんな再編をしていけばいいのか、小学校2校、中学校1校を基本に話し合った。

まず、中学校から話し合った方が、いろいろな面でいいだろうということで、中学校2校を1校に再編することについて、施設面、通学面などについて話をしたが、施設面では、仁科台中も一中也新しい。仁科台中は、学年6クラスで考えて作られているし、一中は、学年5クラスの形で校舎が造られているから、これで一緒になったとしても、現在のままでどちらも利用できるだろう。来年、一中が2クラスになって、仁科台が3クラスの形でいけば、そのようなことになる。

通学方法についても、どちらも電車通学、徒歩、スクールバス、自転車で、今も通学しているので、その範囲や方法を検討することで、解決すると考えられる。

それから小学校4校を2校に再編した場合、旧大町の南北に長い地理的状况を考えたときに、子どもの通学は、先ほどの保護者アンケートにもあったように、通学時間と通学距離を考えて、どうしても南部と北部には学校配置することが必要だろう。ただし、地域に根差した学校づくりが、特に小学校ではどうしても大事になってくる。現在も、公民館活動や育成会と学校の関係で、活動しにくい状況の中でやっていたようなこともある。

できればそれを公民館活動や育成会活動が無理なく、学校の再編等に絡められるような、そうした場合、児童生徒数が半々になるかということ、なかなかそういうわ

けにいかない部分も出てくると思うが、やはり、地域との関係は大事にしていかなければならない事項であるとの意見となった。

施設面では、耐震化は、4つの小学校とも進んでいるが、30年を過ぎているので、いろいろな部分で老朽化が否めない。再編に当たって、施設面での計画的な改修や整備が必要と考えられた。

小学校4校を2校にというのは今言ったとおりだが、小学校4校を3校に、又は小学校を1校にまとめることは考えられないのか、という議論があった。3校にした場合、いずれ再編が必要になってくる。1回ここで再編したとしても、近く、また再編を考えていかなければならないだろう。

それから小学校を1校にまとめて、小学校1校、中学校1校の形を考えたときには、各学年が5クラスぐらいになると見込まれる。今後の正確な出生数の見通しは、むずかしいが、出生数を140人程度と見込むと、今の1クラス35人の基準で割ると5クラスになる。

これに関わってはもう一つ、国や県の動きについてであるが、現在、学級定員数は、国は1年生35で、長野県はそれを受けて全部35であるが、これから先、国が1年生35を30にすると動けば、一気に県も、全部を30、又は25にする、ヨーロッパ並みに学級定員数を減らすようなこともないとは限らない。そうなったときにクラス数が増えてくるので、やはり1校では、クラス数が増えてしまって、小学校の子ども達、特に1年生について数多くのクラスでの学校運営は大変であるとのことで、1校は無理があるのではないか。そんな意見も出てきた。

その他の要望では、幼稚園、保育園の保護者から、もう少し幼稚園や保育園の保護者の方にも意見や、この内容が周知できるようなことをもう少し工夫すべきではないかと。広報には出ているが、他にも工夫をしていかないといけない。

それから、「(4) その他」であるが、幼児教育から小・中まで一貫した教育を推進する、そういう義務教育の市としてのビジョン、大町市としての教育大綱、または目標などをしっかり据えるようなこと、その実現に向けて、例えば現在、教育委員会と子育て部局が別々になっているが、これらを一元化する検討をしていかなければならないという意見も出された。

以上が研究部会としての報告です。

柳澤委員長　それでは、関連があるので(3)の「大町市少子化社会における義務教育のあり方検討委員会報告書」、この説明もお願いします。

三原学校教育課長　(説明)

柳澤委員長　(1)から(3)まで説明がありました。3項目に対して、ご意見をお願いしたい。

B委員　意見の前に確認したい。報告書4ページ。前回の研究部会でもそうだったが、○の3番目、「小学校では、本年度、単学級が」の後が空白で「校存在し、」となっ

ていて、次の段では、「年後」の数字がない。事務局でつかんでいる数字があればきちんと入れてもらいたい。

三原学校教育課長　これですぐ出てくるので、しばらくお時間をいただきたい。ただ、これは、こんなイメージでどうかというものを示したもので、開けておいた。

柳澤委員長　それでは、C委員からご意見をいただきたい。

C委員　私は、なるべく早く適正配置を行ってほしい。7ページから学校の先生方の意見が記載されているが、よく読んでみると、やはり児童数が少ないということは、児童にとって良くない、不利益を被るのが児童だと感じる。

10ページの5に「児童生徒の社会性育成の面から」に「クラス替えができなくなり、人間関係の固定化が心配される。」との記載がある。この点、日本は、教育制度がしっかりできていて、小学校、中学校を卒業できていれば、あとはコミュニケーション能力だけでなんとかやっていけるんじゃないかという思いもあり、ここはすごく大事だと思っているので、いろいろな友だちと接していくことが大事。

市に対しては、意見交換会等ではなく、できれば、こういう現状があるので、こうしたいというところを、意見を聞くのは大事だと思うが、まず、現状を理解してもらって、こうなってしまうと説明する機会を設けるべきじゃないかと思う。

荒井教育長　市側というお話があったので、お答えしておきますが、私が先ほどごあいさつで申し上げたように、ここで決めるわけではない。法に基づいて、例えば、学校再編とか通学区を決める権限は、学校教育法に基づいて教育委員会にある。学校の数などについては、市長と教育委員会と一緒に条例として提案して議会の議決で初めて決まる。ここでまとめていただいた意見が即結論ではない。まとめていただいたものを私どもは受けとめて、次の段階で、こういうまとめをいただいたが市民の皆さんどうですか、と市民の皆さんからご意見を聞く機会を取ろうと思う。恐らくこれをまとめていただくのは、来年3月、1月か2月かわからないが、本年度中になると思うから、市民の皆さんからもう一度ご意見をお聞きするのは来年度以降になると思う。C委員が今おっしゃったようなことは、来年度以降にやっていく。そういう理解でお話していただきたい。

それと、もう一つ、早く適正配置とおっしゃっているが、その適正配置というのは、この報告書の結論にある、要するに、中学校1校、小学校2校のことをおっしゃっているのか、違うことをおっしゃったのか、そこだけよく分からなかった。

C委員　小学校が2校はどうやってやるのか。私は小学校3校にしようと思ったものだから。北、西、南になるのかと。人口が減っているから、3校にすると、また再編が必要になる。

荒井教育長　3校だと、恐らく1年か2年で単級になる。140人というのは、35人で割り返すと5クラスくらいになる。3つの学校にすると、2クラスの学校と1クラスの学校ができてしまう。これは解釈だけなので、それがいいとか、悪いというつ

もりはない。

三原学校教育課長 先ほどの4ページの空欄ですが、本年度は、旧大町市内東西南北の小学校4校のうち、東小と西小の2校に単学級の学年がある。1校については、5つの学年がもう単学級になっている。東小が4年生以外単学級になっている。西小が、4年生だけが単学級。何年後には、という部分は、先ほどA委員の話でも触れたが、もう南小、北小の来年度の新入生が、単学級の見込みになっているので、来年度すべての学校で単学級になるのが見えている。

なお、八坂、美麻については、すべて単学級で、なおかつ八坂には、複式学級がある。

B委員 もう一回確認するが、何年後ではなく、令和2年からは、市内全校で単学級が存在するという理解をしてよいか。

三原学校教育課長 はい。

D委員 補足したい。見込みであって、子どもの転出入については、いろんな保護者の事情で変わってくる。現時点では、6月の調査と変わっていて、新1年生が2クラスになる可能性が出てきている。また、これが12月になったらどうなるか、1月になったらどうなるか、毎月私どもは人数を調査していて、それによってだいぶ変動することはご承知おきいただきたい。

E委員 市内の小学生が1,000人を切るのは令和6年と資料にあり、明らかに人数が減少しているのを目の当たりにしたところである。ここまで、令和元年までの減り方に比べたら今後、数年間は減り幅が少ないような印象があるが、ここまで大体年間70人、つまり2クラスくらい減ってきている現状があり、まさにこの時期に統合という話をする機会が今ここで行われているのは、本当にリアルタイムだと実感している。今ここで、ある程度方針を作っていないで、だらだらとしたら、また人数が減っていったときに、急務になってくると思うので、今ここでこういう話がされているのはすごくいいタイミングだと思う。

来年度も市内の学校で単学級が存在する見込みということで、C委員のおっしゃるとおり、できるだけ早くという部分は同じ意見。私も小学校のボランティアなどに参加しているが、保護者アンケートの中に、幾つか気になった点がある。なかなか厳しい意見もあって、学校に対してもう少しこうやってくれという要望と、自分たちの生活の面でPTA役員や学校行事などが大変なので減らしてくれと。後は、体力の向上も学校にお任せしたいということで、中には、登下校がバスになれば体力が落ちるんじゃないかという意見もあったが、統合の話になって親や市民の意識がもっと高まらないと、この話は進まないんじゃないかと思っている。

今後、子ども達が減っていくことによって、ますます親との関わりや地域の関わりがもっと増えていく流れになっていかないといけない。学校が減るからコミュニティが減るということではなく、逆に、少なくなるからよりコミュニティも増やし

て地域一丸となって子ども達を育てていく。子ども達が学べる環境を整えていくことが一番大事と考える。私は、たまたま北小学校の目の前に住んでいて、学校まで100メートルくらいだが、子ども達は体力もあって通学で体力が減少することは考えていない。小学校でもボランティアで陸上を教えているが、先生たちも任せるだけじゃなくて自分たちができることを提案して、その提案する中から学校側に必要なものを選んでもらうスタイルで、学校側に何かこういうのはないのかと意見を求めるばかりじゃなくて、こういったことが私たちはできるとか、こういったものももっといいんじゃないかという提案をして、その中から学校が選べる選択肢を与えることの方が、先生たちも負担にならないのかと思うし、いいものだけを採用してもらえばいいと思う。

以前、校長先生とお話ししたが、学校の先生達も、本当に子ども達のことを一生懸命に考えてくれているのがわかっているので、そんな中で、よく知らずに批判するのではなくて、ちゃんと実情も踏まえて、自分たちで何ができるのか考えていきたい。

F 委員 学校がなくなると地域のコミュニティが保てなくなること、ずっと言っていて、東小のような小規模校でもずっと残してもらいたいのが本音であるが、子ども達の教育や学校運営に係る経費などを考えると、いずれと言うより、この辺で、統合を考えてなければならない時期に来ていると思っている。

それについて検討委員会でもんでいるが、極端なことを言うと、小学校1、中学校1でいいと思う。そうでなければ小学校を2校にしても、また4、5年経って1校にするという話になってくる。これは大町市に迫っている問題だ。それだったら最初から1校、そうすると、子ども達の中一ギャップのようなこともない。保育園と幼稚園は一緒にはならないかも知れないから、小、中、高校1校ずつ。うまくいけば、それをエレベーターで上がっていければ最高だと思うが、そういう環境もできるんじゃないかと思う。

一点、ちょっと引がかかったのは、私は育成会を預かっていると思うのだが、こうなると非常にやりづらくなる。現在、大町地区の育成会は、三つの学校に関わっているので、非常に大変だと思う。これから、4校を全部一緒にして、1校にするとしたら、四つの育成会で話し合っただけで方向性を決めることはできると思うが、今の町地区の場合は、三つに分かれていて、こっちの地区と話して、それから別の方、また別の地域と話してまとめるのは、なかなかできないと思うので、それだったら育成会も各地域の一つで、同じところで話し合っただけで、どういう行事をやるのか、こんな進め方をしたらいいんじゃないかということができると思う。もし当面2校にしたいという話になったら、できれば完全に地区で分けていただきたい。4つを2ずつに分けると、2つずつで行事などの整合がとれると思う。間違っても今みたいな3つに分けるというような形をとると、なかなかうまくいかない。自治会

の関係もあるので、非常にその辺は大変だと思うが、いろいろ協議を重ねて理解をいただくように進めていただきたい。

柳澤委員長　正直言って、大町地区の育成会は、3つの小学校が関わり、大変苦労している。3つの学校に分かれていたら、まとめることができない。以前、社会教育委員に、学校区で育成会をやってもらったらいいのにと話をした。その話の後に、この少子化の問題が出てしまったので、その話は止まってしまった。

G委員　まさに今、F委員がおっしゃったとおり、私は小学校のコミュニティ・スクールに関わっていて、地域とのつながり、報告書の8ページの「(4) 地域とともにある学校づくり」が、非常に重要だろうと思っている。ただ、現状南小は、児童の数が減っていても、常盤地域の学校は、南小学校という意識が非常に強い。これで4校ある学校を2校にする話になると、「どうして」と。データやどういう事情に大町市があるのか、地域の人たちに理解してもらわなければならない。前段で、懇談会をやるから地域の人に来てね、と言っても、なかなか地域の人が集まらない。しかし、最後に締めくくっているように、「育成を図るコミュニティ・スクールの一層の充実と推進を図っていただきたい。」ということについては、とても大事なことだと思う。また、コミュニティ・スクールについては、2校にしたときに、地域がまとまりながら学校、教育を盛り上げていく方向にならないと、なかなか思うようにいかないだろう。実は、学校におじいちゃん、あるいは親が学校に関わりがなくなってくると、途端に意識が希薄になってくる。コミュニティ・スクールのやりにくいところは、そこにあるんじゃないかなと思っているが、今後、地域住民の皆さんに、小・中学校の現状はどうなっているかよく理解いただく手だてを、今後、少しずつ段階を経て、地域にも理解していただくことが、2校、1校への統合に大変重要なことになってくるだろう。

ただ、現状は、コミュニティ・スクールに一生懸命頑張ってきて、地域の人々のつながりの輪を広げていくことによって、統合の話が出たとき方も地域の人々が、すんなりと考え方を受け入れてくれるのではないかな。だから、構想として、2校、1校の理想的な形を作っても、いざという時には地域の人々の理解が必要になってくるだろう。

B委員　地域と学校との関係は、それぞれ皆さんのおっしゃるとおり。しかし、平地区は、すでに30年前に学校がなくなった。その中で、地域づくりもそれなりにやって来ているわけで、この具体的な数字を提示すると、30年前が思い出される。平小学校を潰すな、筵旗で市役所まで押し掛けた。ところが野口の方は、平まで行くより今度できる北小へ行ったほうが良いから、我々は北小へ行かせろ。平地区が二分した。いずれにしても、やむを得ない状況をまず市民にわかってもらう。そして具体的に着手する場合には、自治会が分断混乱しないような軟着陸を目指すように進めないと、禍根を残すだろうと指摘しておく。

H 委員 部活動の取り組みも、今はいろいろなスポーツをやりたい子がいてもできない、チームの人数がそろわなくて参加できないなどいろいろと問題があるようなので、統合したり、大町市として1チームを考える試みもあるので、非常に生徒達にはいいと思う。

いろいろとお話を聞く中で、小学校4校が2校にしてはどうかとか、中学校をどうするという話が出ているが、具体的にどんなふうに配置していくのか、どんなふうに考えているのか知りたい。

荒井教育長 今のお話はよくわかるし、今までの皆さんも地域の話がされている。それは、ご意見として出していただくということだとどめていただきたい。要するに、ここでは、地域についてまで、議論する場として私どもはお願いをしたわけではない。例えば、小学校2校、中学校1校くらいが適当だ、とかあるいは3校がいいとかを議論していただいて、その場合に、地域を大事にしながら通学区を定めてほしいという付帯条件をつけていただいて結構。ただ、常盤とか平とかの具体的な地域を分けるということは、来年以降、皆さんから報告いただいた後、この委員会での意見を踏まえて、こういう案はどうでしょうと市民にもう一度投げかけて詰めていこうというのが、私どもの方針でいる。そう理解していただきたい。

H 委員 まだその前段でいいということか。

荒井教育長 そういう意味でお願いしたい。ただ、今、B委員のおっしゃった、G委員もF委員も同じだと思うが、まず住民理解をきちんと取ってほしいということと、通学区については、地域ということを必ず念頭に置いて考えていただきたいということは、何校にするにしても必ず付け加えていただきたい。

I 委員 私は研究部会にも参加させてもらったが、小学校に専門の理科の先生がいるとは思わなかった。八坂小には、先ほど説明があったように、中学から理科の先生が来るけれど、中学の先生は、自分の中学の授業を持っていて来るから大変である。その前は、担任の先生がやっていたが、今年は、中学から理科の先生が来て専門的な指導をしている。それは、子どものためにいい。それを聞いたら私としては、申し訳ないけれど、子どものことを考えれば、専科の先生がいる学校編成がいいのではないか。

J 委員 以前から申し上げているが、児童・生徒は減少傾向でこれ以上増えていくことは、ないであろうという想定に基づき、今の議論があろうと思う。そういうことを考えていった場合に、最終的には、統合が一番望ましいと感じる。ただ、統合する場合においては、住民との意見交換をしっかりと、理解していただくことが先決。

それと、私が中学時代の頃に、社の一部の生徒が第三中学校に来られて、要は、全体的な統合ではなかった経緯がある。また、第三中学校から今の仁科台中学校へ、常盤から移った経緯がある。その時もかなり議論がされたのではないかなと考え

る。先ほども言ったが、地域の住民の意見をよく聞いて、どうあるべきかを進めていくことが大事であると思う。

一点お伺いしたいが、来年度から、東・西・南・北小においては、1クラスになってしまって、理科教師を配置できなくなる話がある。この話について、そういったケースが発生した場合には、理科教師が不在のまま学習指導をしていくことになるのか。

荒井教育長 基本的には、専科の先生を含めて授業指導される先生方は、県で配置いただく。県からは、14学級ないと理科の専科の先生を配置いただけない。14学級なければ、結局、担任が理科を指導することになる。

J委員 分かった。小学校5、6年の担任の先生を固定するのでなく、中学校と同様に教科担任体制にして指導すればよいのではないか。

荒井教育長 基本的に美麻小中学校のように小中一貫校にすれば別だが、一般的に普通の小学校の教員の配置では無理。というのは、小学校の先生方は、基本的には学級担任制だから、全部の教科を自分で持つ。そうすると先生がたくさんいれば何とかなるが、決められた先生の数の中では、それだけの対応をやりくりできない。例えば、中学の場合では、1日6時間として週5日であれば30時間ある。実際には30時間までないが、先生方はだいたい20何時間授業を持っている。ある程度空き時間がある。それは教科の数で先生方を配置したほうが、小学校の配置より余裕がある。小学校の配置のまま、そういう教科ごとに先生が代わる教科担任制を導入するのは、現実には無理。そのためには、市で加配の先生を何人か増やすなどしないと、現実的には回せない。しかも教科ごとのバランスも考えなければいけない。非常に難しい組み合わせになってくる。しかも小学校の先生方は、必ずしも小学校の免許以外に教科の免許を持っているか、実は、かなり難しい部分がある。

D委員 今、南小は5年生も6年生も2学級なので、合わせれば4人の担任がいる。もしこの4人の担任が、算数、国語、理科、社会の専門性のある担任が4人揃っていれば、その5年と6年生は、理科の専門の先生が5、6年の理科を持つとか、国語の専門の先生が5、6年の国語を持つなども可能だと私は考えていて、そういうことができればいいなという思いもします。ですが、今教育長がおっしゃったように、そんなにうまく先生が集まることは奇跡に近いことで、なかなか都合のいい人材の配置というか人事は行われたい。

だが、何とかその専門性を生かした中で、できれば専門性の高い先生から教わることによって、授業の準備の時間や評価の時間もすごく短縮できる。効率的に、そういうことができれば、子ども達のためには、大変プラスになると常々考えている。

荒井教育長 結局、教員を増やせば、足りない部分の教科の先生を別に入れれば、何とかなるということである。

J委員 例えば、そういう専門の先生がある学校にいて、テレビ中継をして2校同時

に行うような形を取れなくはない。

荒井教育長　できないことはないが、基本的には、特別な場合を除いてそういう指導は行われていない。ただ、不登校の子どもについては、そういう指導も現実には始まっている。一般的には、子どもと先生が触れ合いながら指導していくことが、とても大事なので、そういうことは例外だと思っていただきたい。

K 委員　八坂、美麻の学校については、四つの観点から現状維持の方針となっているが、市内においては、保護者アンケートの結果を尊重して、進めていってほしい。

L 委員　コミュニケーション能力について、クラス替えが減るとなかなか育たないんじゃないかという話だが、人が減った方がコミュニケーション能力的には、こういう会議もそうだが、たぶん4人ぐらいにして話をしたほうが、意見が出ると思う。それがコミュニティということであると。たぶん、減らしたほうがコミュニティ的にはいいと思う。ただ、学校指導などの面では、学級編成に関わってくるので難しいと思う。

コミュニケーション力を育むことについて、地域の方の熱意や意識改革がすごく重要と考える。そこを改革できるのであれば、コミュニティ・スクールの取り組みの中で、子どもたちは、様々な年代の方と話をする機会を得ることができる。コミュニケーション能力は、地域のコミュニティといったところで伸ばせればよいと思う。

地域のコミュニティが、連携を取ってそういった可能性などを残していくことが重要だと思う。熱意をもった地域の人に関わってくれるようにすることは簡単ではないが、いかに地域の意識を高めていくかが重要になるかなと思う。

子どもがやりたいことをやる時に、いろいろなスキルを持つ地域の方から学ぶことができ、興味あるところを伸ばしていけることが魅力だと思う。

M 委員　前回の委員会で皆さんの話を伺ったり、研究部会に何度か出させていただき、小・中学校が今どういう状況になっているか知る機会ができて、これから自分の子どもがどうなるか考えることができるようになった。

私は、小さい町で育ったので、単学級で育っていて、高校までずっと1クラスだったので、2クラス以上のある学校の様子がわからない。保護者アンケートで2、3クラスがよい、という意見がすごく多いのは、部活動の団体競技や社会性などを、学校の中で、よい意味で競争することにより育むことができるからとの考えから、2、3クラスがいいということだと感じた。

私は、36人1クラスで育ったが、多いからコミュニケーション能力が高いかというのと、そうでもない。私は美麻に住んでおり、美麻の文化祭に行ったときに、美麻中学校の生徒一人ひとりが自分の意見を持っていて、ちゃんと自分で考えた言葉でしゃべっていて、多人数だろうが少人数だろうが関係ないというか、美麻の学校の

あり方はすごいなと思っている。

私が研究部会に何回か出た中での個人的な答えとしては、旧市内の学校は、中学校1校にした方が、保護者が選びやすいと思った。自分の子は、小規模校の方がいいかなとか、やっぱり2、3クラスあった方がいいとか、違う特色が出ていたほうが選びやすいと思っている。今は、人が関わっている仕事を、これからは人工知能を持った機械がどんどんできるようになっていった時に、人間らしい子どもを育てたいと思ったら、大町の素晴らしい環境や、地域の素晴らしい人との関わり合いの中で、育つことができる、自分を大事にできる子どもになってもらいたい。

保育園の連合会として、こういう話し合いがあったことを保護者に伝えたいし、アンケートを、子どもがいるとかいないとかに関わらず、むしろ10代、20代に、大町市はこういうふうなことを考えていると、伝えてもいいかなと思った。

N 委員 現行の日本の教育制度を、法的な縛りを前提に考えていけば、当然、少子化の時代に合わせた統廃合が、必然的なものだと思う。あとは、場所をどこにするかに尽きるが、それは、今後の議論に任せるとのこと。むしろ、義務教育のあり方検討会ということ、日本の義務教育のあり方を大町市がリードするということの検討会ならば、いろいろな意見が更に出てくると思う。

A 委員 今、ここで考えていることは、学校の再編だが、子どもを育てていくときに、今までは、常に学校の主となり、地域においてもそれぞれ取り組みがなされてきたが、やはり、地域は地域として、子どもを育てる視点が、もっと大事になってくるだろう、学校から切り離して、そういうことが必要になってくると、私は感じられる。

それとはまた全く別だが、実は私もコミュニティ・スクールに係わっているが、いろいろな課題を持っている。子どもを育てていくため、いろいろな組織がある。その組織のあり方にも、やはりメスを入れて、例えば育成会があるし、補導委員会もあるが、地域にある組織の見直しについても、この機会に最もいい形になるように議論をしていかなければいけないんじゃないかと思う。

O 委員 義務教育のあり方検討委員会ということで、学校について検討しているが、やはり学校は、何のためにあるのか。学校の一番の目的は何かという根本に立ってみると、学校は、確かにその地域コミュニティの核となる施設でもあるけれど、やはり子どもの教育の場というのが一番の目的だと思う。

そういう観点から考えたときに、子どもの数が減っている現実と国や県の基準を前提に考えると、子どもの数が減るということは、1クラスの人数が減るとか、クラスの数が減るというだけでなく、教育の質に影響が生ずることに気をつけなければならない。例えば、今、出ていたように、専科の先生が少なくなるんじゃないかと、いなくなってしまうことや、集団としての多様な教育ができなくなってしまうという部分で、教育の質に関わってくる。

子どもの数が減っていくと、今の基準に当てはめると教育の質が低下してしまう。では、どうしたらいいかと考えなければいけない。

それは、私達が考えるだけでなく、そういう仕組みになっていることを市民の皆さんに広く理解してもらわないと、なかなか、学校のあり方とか、学校の再編は理解されないのではないかと思う。

学級編成等に国や県の基準があり、子どもが減っていく中で、どうして教育の質に影響してくるという部分を理解してもらう必要がある。

話が変わるが、今回の研究部会の報告をいただいたけれど、研究部会の報告は、総合的に様々な面から検討されていると感じた。子ども達の教育にとって、どういうふうなものがいいか、どういう影響があるという部分ももちろんだが、学校の今の中学の施設なども含めて、実現性にも、たぶんに配慮された報告になっている。

中学2校を1校にした場合は、今の学校の施設からいけば、どちらも現在のまま利用できるといったことまで踏まえていただいているので、この研究部会の報告は素晴らしい報告だと感じている。このことから、この報告に沿った形で、検討委員会の報告をまとめていただくということで、良いのではないかと思う。

P委員 私は研究部会に席を置いていたので、こういった形でいいかと思う。

ただ、個人的なことを言うと、私も大町の小学校、中学校で学んでおり、他にもそういう方がたくさんいて、自分の学校がなくなってしまうことへの思いは、いろいろな思いが交錯すると思う。それを乗り越える時間がたぶん必要だろう。

研究部会でもそうだったが、いろいろな意見が出て、最後はこういうことしかないよね、と納得するのに研究部会でも時間がかかったことを考えると、そういう時間を市民の方々にも持っていただく。そういう時間が必要だろう。

その一方で、部活のことが問題になっている。部活には、中学校体育連盟、中体連という組織があって、子どもの数が少なくなって、部活をどうするかとか、大会をどうするかということを、この2年くらい議論しているが、なかなか意見がまとまらず、その間にチームがなくなっていつている。だからもう実態に追いつかないことになっている。統合の話というか、学校を考える会も時間が必要だけれど、実際には、時間がないというのが現実ではないか。気が付いたら子どもがいない。そういうことにならないうちに、やはり動かなければいけない。

D委員 6月の時点では、新1年生が34人になる予定だったが、ここにきて37人まで増えた。このままでいけば、来年2クラスが維持できることを申し上げたくて、最初にあんなことを言った次第。ただし、そうなっても、県、国の基準で、理科専科はいただけない。理科の先生は、現時点では、来年からいなくなる。これは6月の時点でわかっていたことなので、先生方にお伝えして、来年どうするかも含めたことは職員に伝えてある。なぜ6月に伝えたかということ、こういう危機的なことは早く伝えておかないと、2月になって急に、来年から理科の先生がいないと言った

ら、理科専科がまずびっくりするし、当然、5、6年生の担任もびっくりして、来年は、理科は自分がやるんですか、となるので、今のうちからそういう準備をしてもらわないと、うまく事が進まないということを考えたから。

少子化が進行する中、混乱を招かぬよう、また、まだ生まれていない未来の大町の子どものためにも速やかに検討を進めなければならないと考える。

学校の立場から言うと、地域の応援をいただかないと、学校は存続できないと思っている。今日もマラソン大会があったが、地域の方がボランティアで来て、長時間、子ども達の走りを応援してくれた。そういう中で、学校の子供達は成長している。今後、再編の検討が進んでいくと思われるが、応援していただける学校を目指して、学校づくりをしていきたいという気持ちに変わりなく、人数が多い、少ない、古い、新しいということもあるが、与えられた環境の中で、人的環境、物的環境を、私たちが最大限に生かしたい。そういう気持ちは、どんな数になっても変わりはない。

Q 委員 私も研究部会に参加して、いろいろ検討させていただいた。この会議で出す方向性としては、いただいた報告書案でいいと思う。ただ、地域との連携と周知は、きちんとしかなければいけないと思うので、その辺の方法や、時間をかけてしっかりやっていただきたい。

子どもを一番に考えると、ある程度規模があって先生が確保できるのが、一番いい状況だと思っている。先ほどコミュニティ・スクールの話が結構出たが、私も第一中学校の学校運営委員をやっていて、コミュニティ・スクールの総務としていろいろなことを担当している。一中でも、アルプスマラソンなどにボランティアで出ていく場面もあって、運営側から感謝され、子ども達も必要とされることが、嬉しいので一生懸命やって、いい顔をして作業をしているので、地域との関わりは非常に重要なことだと思う。

中学校一つ、小学校二つの編成になると、さらに大きな地域で一つの学校、同じ二つの学校ということになるので、学校で必要されているものを地域が応える体制をきちっと作っていただきたい。そのためには、いろいろな団体との連携、情報共有等が必要になると思うので、その辺もきちんと検討しながら、この話を進めていただきたい。

柳澤委員長 いろんな意見を出していただいた。ここで、専門的な見地から R 委員からご意見をいただきたい。

R 委員 議論にご一緒させていただき、感銘を受けている。というのは、大町の義務教育と地域を非常に大事にしようという思いが強く感じられたからである。ほかの県内の動きには、ここまで丁寧に行っている自治体はない。保護者アンケートを実施したが、やらない自治体も多い。さらに住民にアンケートをとるアイデアは、そもそも想定していないところが多い。にもかかわらず、保護者アンケートを2回

やるということも含めて、非常に丁寧に進めてきていただいていることは、私としては、驚きと共に敬意を表したい。

そういった中で何点があるが、一つは、こちらにいらっしゃる委員の皆さんにおいては、これだけ慎重に、1年以上時間をかけながら、たぶん、その会議ごとに発見があったり、改めて数字に向き合い気づくことなどが結構あったと思う。

委員の立場で関わっていてもそのようなことがあるので、やはり保護者やこれから義務教育を迎える方はもっと向き合っていたきたいし、情報が必要だろうと感じている。先ほど、0委員からの話もあったけれど、何のための学校か、地域の皆さん方がいる前で言うのはおこがましいが、やはり子どものためであり、その子どもがひいてはその地域で生きていくことになるかもしれないということで、やはり大事に育てていきたいという想いは、皆さん一緒だと思う。

最終的に教育というのは、恐らく自律的な人間、自分で自分をコントロールしていく。さらには、そこでのコントロールというのは、誰にも頼らないという意味ではなく、自分が依存できる機会をたくさん増やしていけるかどうかということなので、その意味では、多様な人間と触れ合いながらいろいろな経験を積んでいくことだろう。

そういった中で人数が減ってくるのは、同世代の人間関係の数や質、量というものにも影響が出るし、先ほども話が出たように、教員の数、まさに典型的な公式としては、子どもの数が減るとクラスの数が減り、教員の配置にも影響が出てくる。先ほど理科専科の話があったが、いろいろな場面に生ずることになる。こういった教育の質の問題についての議論は、ぜひ引き続きしていただきたい。

一つの提案であるが、今回、素案という形で、報告書の素案が出たが、たぶん、研究会の報告資料は、相当踏み込んで書いていただいている。もし可能なら、この文言をこのまま残すかどうかは別だが、こういったことも含めて多くの方々に情報に触れていただく機会があったほうが、今回の報告書の素案だけだと、こういった議論をしてきたかとか、プロセスの部分が見えにくいことがある。こういった形がいいのか、研究部会の皆さんの了承も得ながら、掲載について検討してはどうか。

あと、もし学校の適正規模を進めていく場合には、先ほどもP委員から「時間」という問題が出た。これは私が過去にお手伝いした経緯があるが、既存の学校が統合という形になった場合には、その学校としてどういう形で閉校を考えていくのかに時間が必要。例えば、閉校式をどうしていくのか。さらには、統合という形をとるのか、新しい学校をつくるのか。そこは新設するという意味ではなく、学校の名前をどうするのか、さらには校歌をどうするのか。新たに校歌をつくるのか。そういう個別的なもので、これは、後ろ向きの議論ではないので、大町として新しい学校をつくっていくスタンスで検討していただければ、それに応じて地域における様々な組織なども、皆さんぎりぎりの中で、子どものためにということで、一肌も

二肌も脱いでいただいている中で、今の組織の形がいいのかどうか考えていく、まさに再編をしていくことになると思うが、次世代の子どものために多くの方々を巻き込んでいただきたい。

保育園関係者の方は、いっぱい心配な思いがたぶんあると思うので、この次の議論には、そういったこれからの方々も含めた議論を展開していただきたい。まとめで言うわけではないが、要望もさせていただいた。この素案の次の形を皆さんで具体的に検討していただけたらと思う。

柳澤委員長 時間も大分進んでいるので、最後にご意見がある方がいましたらお願いいたします。

(発言者なし)

本日は様々な意見が出たが、それらを基にして報告書案を直していただきたい。
荒井教育長 それでは、本日出され内容を踏まえて、事務局で素案を作成し、もう一度皆さんにお示しして、次回は、ある程度精密な内容が入ってくると思うので、字句や中身について議論いただく方向でよろしいか。

(反対者なし)

では次回は、そういう形で素案の原稿をお出しするので検討をお願いします。

勝野副委員長 (閉会の言葉)

午後8時20分終了